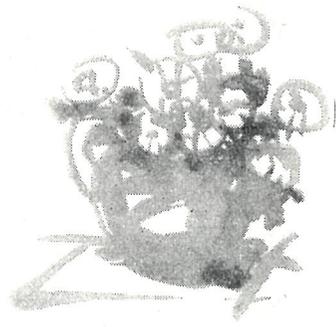


座右銘

湯浅 八郎



達人の至言

近頃の若い人達は、座右銘などという古めかしいものを考えてもみないかもしれないが、私たち明治、大正人の多くは、古今東西の聖賢の名言金句を撰んで座右の銘とし、日夜、反省修練の糧としたものであった。私は少年時代を京都で暮したが、その頃、私がついていたであろう座右銘については今はもう忘れてしまった。あるいは一時愛読し、耽読した救世軍の山室軍平先生の筆になるブース大将伝の中から、何にか選び出していたかも知れない。大将といえば、明治三十年代に京

都を訪れ、市の大公会堂で連日伝道講演を催したが、その火をはくような熱弁と気魄とは聴衆を震駭し、多くの改心者を出したのであった。「若し皆さんの中で神にそむき、自己の欲望充足に終始している人がいるのなら、そのような醉生夢死の輩は必ず地獄におちるぞ」ダウン・ダウン・ダウンと白髭の大将が大声叱咤したときは、実に身の毛もよだつほど恐ろしかった。この演説をきいた同志社の学生仲間では一時このダウン・ダウンが流行して、教室の階段を登るときも、大声でダウン・ダウンを連呼しながら、実はステップをア

ップ・アップしたものであった。

私が京都帝国大学を辞して同志社に赴任したときは、私は私ながらに一生一度とも言うべき覚悟を決めたことであった。その際、私がひそかに日夜懐申していたのは、新島襄先生の長逝後、同志社の責任を挺身分担した金森、小崎、徳富三氏宛に書き送られた勝海舟の書簡であった。これを抄録すれば、

「今日行掛之大業跡々を踏締候は不可言六カ敷ものに候間 諸君御深慮有之 百難重りに到候事と御覚悟専一と存候 小拙是迄難危之衝に当り 唯々一誠字不撓之心得に而 内外我が負担するもの悉く矛盾と心得居 漸く廿余年を経過し猶如一日の思を成申候次第 後善の策も甚六カ敷 案外の事も生候もの」と言うのである。さすがに達人の至言。私は同志社の総長室で幾度かこれを涙読して独りひそかに戒められ、慰められ、励まされたものであった。

エレミヤの予言

日米戦争が勃発したとき、私はいわばキリスト者平和使節として全米を講演して廻っていたのであったが、不幸に、一朝にして敵国

人の制約をうける身となった私は、飽くまでも日本国民として、敢て敵国アメリカに踏み止まる決心をした。私の理由はむしろ簡単であった、戦争は早晚終結する。だから祖国日本にとって最も重大な問題は、戦争そのものよりも戦争の後に来る平和である。そこで、私としては直接に戦争に協力するよりも、間接に平和の準備に協力することこそが真に愛国者の道である。私はこのように考えた。何年つづくかわからない戦争、死生のほども予想し難い家族の安否等。もとより私情においては米國政府が用意してくれた帰国者交換船グリップス号に乗り込みたい衝動にかられなかつたわけではなかつた。しかし私は私の良心に従って最も正しいと思ふままに生きぬきたいと願つた。その際、私は再会も期し無い東京の家族、別してひとり息子の洋に、万一の場合、父の遺言として必読すべしとして指摘したのは、新約聖書ローマ人への手紙の第十二章であつた。そこには、「あなたがたは、この世と妥協してはならない。むしろ、心を新たにすることによつて、造りかえられ、何が神のお旨であるが、何が善であつて、神に喜ばれ、かつ全きことであるかを、わき

まえ知るべきである。」とか、「悪に負けてはいけない。かえつて善をもって悪に勝ちなさい。」などという言葉があるのである。

かねてから覚悟していたように戦争が長引くにつれ、日本の敗北はいよいよ確定的になつていった。しかも非運な祖国の同胞はほとんど無意味な犠牲を強制せられつづけていた。本当に呼吸づまるように痛憤悲嘆の日夜であつた。その頃、私の心のよりどころ、魂の支えとなつたものは言うまでもなく聖書であつた。私は母の形見の聖書を精読した。そして、忘れもせぬ一九四五年三月一日の深更、旧約聖書エレミヤ書第七章を読むうちに、日本更生の原理と条件とに関する予言を発見して、忽然また豁然、祖国再建の希望に開眼し、感激し、一切の悲観を清算して一途に平和日本実現に献身することを誓つたのであつた。全く電光のごとくに私の心胆を貫らぬき照らしたエレミヤの予言はつきのごとくである。

「汝らもし全くその途と行を改め、人と人との間を正しく裁き、異邦人と孤兒と寡を虐げず、無辜者の血をこの処に流さすほかの神に従いて書をまねかずば、われなんじらを我汝等の先祖にあたえしこの地に永遠より永遠

にいたるまで住しむべし。」私はこれをつぎのように悟読した。すなわち、日本は絶対に滅亡しない。日本人は神がわれわれの祖先に与えた祖国日本に永遠に安住することが約束されている。ただしそれには条件がある。その条件とは、国家としても個人としても過去の途と行とを根本的に悔い改め、一切を革新更生することであると。したがつて私に示されている責任はこの革新運動を推進することであると。だから私が一九四六年十月、八年ぶりに横浜に上陸したときの第一声が、ユネスコに関してであつたのである。

人生巡礼

・ 戦争中、ニューヨークで読んだものの一つに天草版金句集があつた。そこで私は黄山谷の詩、百戦百勝不如一忍 万言万当不如一黙を見つけて、この含蓄のある一忍一黙に深い愛着を覚えた。また何にかの本で、月洲の詩句、未春心已春 に接し、「冬来りなば春遠からじ」に通じるこの心境を、実にわが意をえたりとして喜んだ。この詩は、その後、いろいろ調べてみているが未だにその出所がわからない、どなたかお教えいただければ誠に

有難い。私は月洲の詩から、満天下都是春意という字をならべてみることもある。

国際基督教大学の創立に協力するようになってからの私の座右銘は、つぎの説苑の語である。衆人之智 可以測天 兼聽独斷 惟在一人 私はこれを第一線で責任をとるものもの民主的心がまえであると解釈して不断反省の業としているのである。最近、私は毛沢東の座右銘と伝えられるものに接して感銘を深うした。それは横眉冷對千夫指 俯首甘為孺子牛 というのである。前句は公人として所信の前には百万人といえども何にするものぞという覚悟と気魄とを表し、後句は私人として人間味豊かな和平親愛の心境を讃えたものであろう。さすがは歴史にその名をとどめるであろう毛沢東らしい座右銘だと思ふ。

少年時代に受洗して以来、私の信仰生活にはその熱度や感度の変転はあったが、私の意識する限りいまだかつて福音を耻ぢたことも、受洗を後悔したこともない。今日、私は年既に七十を越えてなおキリスト者になりたいたいという十七の少年の悲願を、胸に秘めている一求道なのである。恐らく私は、終生キリストの真理と平和とを求めて私の人生巡礼を

終ることであろう。だとすれば、しいて座名銘を聖書に求めるとなれば、たとえばつぎの聖句などであろうか。

「天にいますわれらの父よ、

御名があがめられますように。

御国がきますように。

みこころが天に行なわれるとおり、

地にも行なわれますように。

わたしたちの日ごとの食物を、

きょうも、お与えください。

わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、

わたしたちの負債をもおゆるしくください。

わたしたちを試みに会わせないで、

悪しき者からお救いください。」

マタイによる福音書六章九—一三。

「まず神の国と神の義とを求めなさい。」

同六章三三。

「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ。」

マルコによる福音書一二章三一。

「七たびを七十倍にするまでにしない。」

マタイによる福音書一八章二二。

(国際キリスト教大学名誉総長)

第四回 懸賞論文募集

題目「民主主義の発展と新島 襄」

応募資格 同志社諸学校に在学中の学生・生徒

原稿用紙

四〇〇字詰 三〇〜四〇枚

切 昭和三十八年九月三十日

賞 金 一等二万円 二等一万円

三等五千元

送付先 同志社本部内

主催 新島 研究会

第三回懸賞論文の入選者

一・二等 該当者なし

三等 水野 鈴一(経済学部三回生)

大河内通弘(香里高校三年生)

佳作 大西 邦雄(香里高校三年生)

田原 剛(二年生)

常塚 成策(三年生)



アジア——三つの横顔

香港・マラヤ・中国

香港まで行つて

オーテス・ケリー

台北航路

どうしたことか、アーモスト館新館建築の一年間のゴチャゴチャや、普段の雑用が重なって、中心性網膜炎という診断をこの春いだいた。アーモスト館の新館であるゲスト・

ハウスのことは、ここ五年間の懸案であったが、何とかうまく動き出して同志社、アーモスト両大学が誇りに思つてもよいと思う。しかし雑用々という病気は簡単に治るものでもなし、学園の真中に住み込みしている自分としては、免疫を期待するより仕方なからう。雑用の一つは、丁度本年をもつて五十周年を迎えるところの、神戸にあるカナディアン・スクールの理事長が私に回つて来たので、自分の母校の一つでもある以上避けられなかつた。一億の予算をやつと切るような可愛い小さな学校だが、ライシヤワー博士が行つた東京のアメリカン・スクールに並ぶ関西で一番揃つている小・中・高等科の英

語教育の学校である。普段の雑用に加えて、ほとんど一人前の仕事といつてもいいほどの理事長役を重ねて到頭目に来たらしい。

という訳で、うちの医者に聴いてみると、休養が一番よい薬だと言われた。そこで前から行きたいと思つていた香港へ旅することになった。五月の下旬、それも僅か十一日間の余りゆつりした旅ではなかつたが、久しぶりに女房と二人きりで「旧婚旅行」というべきかも知れないような旅行に出た。

行きは飛行機、帰りは船という抱き合わせの特別レートの仕組みがあつて、これを採ることにした。狙つていた帰りの船は、是非スカンディナヴィアの貨物船で帰つて来たかつたが、丁度この頃になくて、仕方なくアメリカ船のプレジデント・クリーヴランド号に乗つた。これも希望していたエコノミー・クラスが一杯で、一等の下の下くらいのところご予約させられた。つまり私の旅行法ではアメリカの乗り物に出来るだけ乗らないことにしている。理由は、乗り物はいけれどアメリカ人はサーヴィスは余り上手な方ではないし、慣れている乗り物の組み方や習慣の中で旅するよりも、かえつて知らない風習や乗り

物の内部の造り方をしていようものに乗る方が面白いし、自分の教育にもなる。(実はアメリカの飛行機会社や船会社もこれに気がついて世界各国のエア・ガールやボーイを雇ったり、アメリカ得意のメッキ建築を相当曲げて来ているのも事実であるが)

伊丹飛行場、いや大阪国際飛行場から、台湾を中心とするC A T社のマンダリン号に乗って沖繩経由で台北に、昼過ぎ到着した。

台北24時間

私も戦時中沖繩に暫くおったこともあるが台北は初めてだった。C A T社は近頃余り人気がないプロペラ機に乗ってくると、一晩向かう持ちで台北のホテルに泊めてくれるというので、ホテルまで送ってもらってから早速ブラブラ台北の街を歩きに出かけた。そこそ足車で。台湾は三年前のアーモスト館の寮生の沖繩、台湾、香港行きの団体旅行の頃から聞いていて、戦時状態の気分で人の感じも重いと聞いていたが、飛行場では税関も警察もさっさと通してくれたし、二十四時間以内の感想だが、全然難しい感じを受けなかった。天気がよくて暑かったが、四時間近く女房とブラブラあっちこっち覗きながら歩い

た。車はダットサンやベント系が多かったが、ジープも沢山走っていた。バスも沢山走っていて、市外バスは日本並みとまではゆかなかつたが、市内バスはまるでオンボロバス。頭それにひとつ乗ろうと思つて乗り込んだところ、十五、六の可愛いバスガールは日本語も出来ず、切符を買うだけでも往生した。というのは切符は道端のボックスで買うらしく、それが分ると親切に車を停めて、二枚買う間乗客も笑いながら待っていてくれた。

台湾の若い人からは非常に健康的な感じを受けた。男女のつき合ひもあっさりしていて、女の子はテレれることもなしに平等に互いに当たっているようだった。台北の街はとに道幅がゆっくりあって、多分日本の植民地政策のお蔭ではなかるうかと連想した。ただ、黒くてでかいキャデラックやクライスラーみたいな車人さんのそれもお偉方のものであったらしい。

香港へは三時間にもかかわらず、朝の楽な旅だった。十二時間ぐっすり眠ったせいかも知れない。香港は一層天気がすかっとして暑かったが、空気が乾燥しているだけに気持がよかった。アーモスト大学を出てから私はイェール大学の大学院に行き、女房もイェール

の医大であるので、いわゆるイェール・イン・チャイナというイェールがやっている新シア大学の方に安く泊めてもらえるよう頼んであった。これもまた同志社とアーモストのような関係のイェール版で、その若い代表の九竜側のアパートに泊まることになった。

香港商人

香港は文字通りの「フリー・ポート」であつて、さすがヴィイザ、税関関係はつとより早い。乗ったタクシードも一遍に分かるし、道の舗装も立派であつた。これはヨーロッパ並みの常識が働いているに違いない。教授なりにもう少し通つてあつたなら、バスでも立派にアパートの真ん前まで着けられた。つまり、バスも非常に合理的で数も多い。香港にはまる一週間しかいなかったが、全くあの交通の便のよさは気に入つた。わが京都に是非勧めたいと思つたのは、あのヨーロッパ風の二階建てのバスと電車である。急行市電をラッシュ・アワーに走らせるくらいなら、二階建てのバスや電車を利用すれば倍の能率が上がるはずだ。何も電線を引き直す必要はない。今の高さで結構いけるはずである。バスも同じく。是非日本の都市交通マヒにこの案を考

えてほしいとつくづく思った。

私らの香港旅行は、十年分の服を作れば旅費が浮いてくるというはずのもとに考えてあった。さすが服も生地も立派なもので、作り方も上手だ。しかしもう今頃はそう得にはならない。この考え方は三、四年前で打ち切りで、さすがこっちが手選れで田舎者と見られても仕方なかった。♪ボン引き♪かと思つて相手にしなかった青年が実は♪服引き♪であつて、後で成程と思つたのは店が二階にあつたわけ。これなら一階に堂々と出ている組より一段安いはずだと思つて、引っぱられて行つた。最初は香港商人と警戒していたが、非常に親切で良心的と見えた。客も多い。五人兄弟で、シンガポールとかけ持ちで服専門であつた。そこへ何回も足を運ぶことになつたわけだが、行くたびにごとに客が違つていて、なかなか参考になつた。日本語や漢字の実力を少し見せると、そつちも歓迎してくれてベールから来ていた日本人の二世の通訳もさせられた。つまりベルーのワタナベさんはスペイン語と日本語しか出来ないの、さすがの香港商人も困つた風だつた。

私は足が大きい方で、十二文の靴は日本で

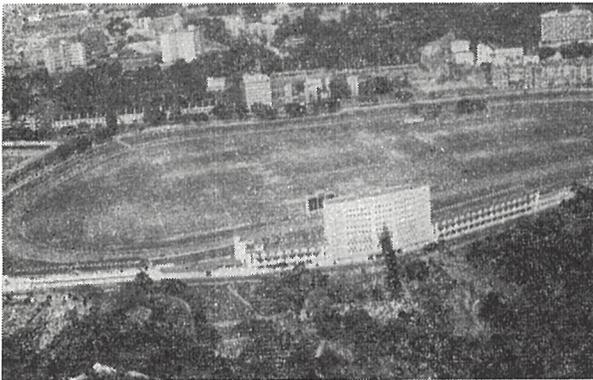
はなかなか手に入らない。一番好きな靴を持つて行つてそのまま作らせてみたが、まあまあという程度で靴の方は余り板についてないという感じ。

城壁の町

是非一度田舎に行つてみたいと思つていたところ、丁度香港まで追いかけの連絡をしていた『読売』さんに発つ前の日にかまつた。いろいろテレビ関係で写真を撮れという注文であつたから、田舎に連れて行つてくれと頼むと、半日ニュー・テリトリーズの方にブルード・バードで案内してくれた。目的は五、六百年の歴史のある古いウォールド・シテイ（城壁の町）であつた。これは阿片戦争で幾らか潰されたらしく、直つてはいたが非常に暗い感じ。そこにいったのはオバアサンと子供ばかりで男は一人も見えず、若い女もみんな他に外かけていたらしい。びっくりしたのは、丁度みつしり詰まっていた城壁の中の正面にお宮があつて、半分物置きにされて使われていながら、裸電球ひとつが天井からぶら下つているだけで、大した祭壇ではなかつたが、花がちゃんと飾つてあつたこと。オバアサンらはハッカ族であつて、目がほとんど

見えずトラホームが蔓延していたらしかつた。帰りがけ、大屋形船の有名な料理屋で一休んだところ、有名人の写真が沢山飾つてあつた中に柘錦が顔を出していたのが嬉しかった。

香港の感じは非常に現実的で合理化精神に富んでいるようだった。香港島の本山である



香港競馬場

はずの聖公会の大伽藍に立ち寄ったら、丁度大英帝国サンデーであつたらしく、ボーイ・スカウトや青年団を挙げて礼拝していたが、結構万国の代表も信者も見えていた。大丸やその他もベースは踏んだが、最後には服の仮り縫いをドタン場でもらうだけで精一杯。

香港は非常に水に困っていて、六月までには普通の年であつたら五十センチの降雨量は、三時間しかいただけなくて、英米両海軍が軍艦で水を作って上げて奉仕していたくらいだった。プレジデント・クリーヴランド号での三日半の静かな航海で、種子ガ島を通る途端に雨が降り出した。十日間陽に焼けてきた一方、帰国した気持で目も幾らかよくなつてはいたが、またその目でぬけた分だけ追いつかなければならない羽目になった子供たちとアーモスト館の寮生の顔を見るのが嬉しかったと同時に、留守中に溜まった郵便も無視はできないと悟った。

(文学部教授・米國文化史)

若い国マラヤ

酒井美智男

首都クアラルンプール

春もたけなわの日本を発つてマラヤ連邦の首都クアラルンプールに向つたのは、四月十五日であつた。途中、バンコックに一泊、十日にはクアラルンプールに到着したが、こゝは赤道に近い常夏の国、慣れぬ暑さには先づ閉口した。しかし、宿舍のマラヤ大学に落ち着いて見ると、部屋には天井に扇風機があつて案内のきよい。それに初めての夜を過ごして見ると、窓を明け放しにして置いて

も、蛾や蚊の侵入もなくそよ風に吹かれながら安眠が出来た。これなれば九日間の滞在も快適に過ごすことが出来ると、安心が出来た。この市の人口は約四十五万人、マラヤ第一の都会であるが、緑の森の中にあると言つてもよいほど木の多い都市で、椰子の木が恰好よく並木をつくり、家々の前庭は緑の芝生が

手入れもよく行きとどいていて、目がさめるようだ。後に聞いたところによると、雑草などを生い繁らせたままだと、警察から警告を受けるとのこと、また、虫の絶滅をはかるために、空から殺虫剤をまくとのこと、ほんとうに美しく清潔な町だ。

生ま水は東南アジアのどこに行つても呑むなと教えられて来たけれど、ここでは少しの心配もなくガブガブ呑むことが出来た。植民地経営の上手なイギリスと言う良い家庭教師に教えられて、一九五七年の独立後六年も経たないのに、順調な発展ぶりを見せて、アジアで戦後に独立した国々の中では優等生になつたと言える。

マラヤ大学

さて、今度の旅行は、先づ第六回アジアY M C A指導者協議会に日本Y M C Aの代員の



クアラ Lumpur 市街

一人として出席するのが第一の目的で、その後、シンガポール、マニラ、香港、台北と訪ねて、各国のYMCAとの親善を深めるのが目的の第二であった。

アジアYMCA協議会の会場となったのがクアラ Lumpur にある国立マラヤ大学である。会議は十七日から始めて二十四日まで続

いた。マラヤは四月、五月が盛夏で連日三十五度を越える暑さ、そこで大学も夏季休暇、学生のいない寄宿舎が代員宿舎となり、授業のない教室が会議室となったわけである。

マラヤが独立するまでは、マラヤ大学はシンガポールに所在、独立後シンガポールの旧マラヤ大学はシンガポール大学となり、マラヤ大学は新しく首都のクアラ Lumpur に設けられたのである。

この大学は市の近郊のジャングルを切り拓いた広大な敷地に、文学、農学、理工学部が点々と建てられており、一見公園のように感じられるのも、中央部に大きな池があり、ボートも浮んでいるからであり、校舎もまたざんしんな設計の近代建築でもあるからである。近く医学部も設けられるとのことである。

寄宿舎は、レジデンシャル・カレッジと呼ばれる四階建が第一と第二とあって、われわれはその第一に全部止宿したが、一階にはロビー、キャフテリア式の食堂、広々して清潔な調理室、舎監室、管理事務室、体育室があり、二階から上が学生宿舎となっている。一室は二人、ベッド、机、洋服タンス備付、天井に扇風機があることは前に述べた通り、全

く行きとどいた施設である。

学生数は千四百人程と聞いた。その六十%がマラヤ人三〇%が中国人、一〇%がインド人という比率だが、理科系は八〇%までが中国人とのこと。会議中に知り合った中国系高校生は、「マラヤ人は頭がよくなくてもこの大学に入れるのに、われわれ中国人は頭がよくても入学数を制限されていて不公平だ」と不平をこぼしていた。たしかに大学でも中国人の成績が格段に上だとのことである。マラヤでは七百万の人口の中、マラヤ人は四十五%、中国人が三十五%、二十%がインド人という構成であるから、ややマレイ人偏重のきらいはある。経済はがっちり中国人に押えられているから、せめて政治の方はマレイ人が押えようとの意図もあるようだ。事実、官吏、軍人警官などはほとんどマレイ人である。独立国となったからには、自国の力で将来になう政治家や技術者を養成しようとの意欲は充分に感じ取れる。

この大学の構内に、独立した建物で十階位のかかなり大きなものがあり、そこは夜もあかあかと電燈がついているので、あれは何かと尋ねると、それは国立国語研究所で夏休みも



マラヤ大学

なく授業が続けられていると教えられた。これは「マラヤ化」政策の一つで国語統一運動の準備として、マラヤ語の先生を養成しているのだとのことである。一九七〇年からは、マラヤ語を唯一の公用語にしようという目標を立てているが、それには大量の教師が要るので、高校出身者を二カ年教育するので、授業料は無料、その上、月々七十五マラヤドル（一ドルは一二〇円）の小遣いまで支給され、新卒として教員になれば月給は三〇〇マラヤドルというのだから結構なことだ。定員は四百五十名、授業は全部マラヤ語、録音設備を整ったスタジオもあるとのこと、熱の入れ方

もわかる。

拓かれるマラヤ

この大学のはづれからニュータウンとも呼ばれているベタワンジャヤ市である。いわばクアラルンプールの衛星都市。ここもかつてはジャングル地帯であったのを、政府が千六百ヘクタールの土地を買い上げて開発したものである。自動車で行って見ると、広い完全舗装の道路（中央に緑地帯）が縦横に走っていて、その両側に住宅や工場が建てられている。住宅は六千位とのことだが、将来は六万戸まで建てる計画とのこと。すでにスマー卜な市庁舎、警察、銀行、商店街、学校、病院なども建設済みで、全くすばらしい。

工場は重工業の大規模なものではなく、消費財中心の中小企業がほとんどであるが、これがかえってマラヤの実情に適合している。外資導入も主としてマラヤが今まで輸入して来たもので必要な物資をバイオニア・インダストリーと称して優先的に取扱ひ、二年ないし五年は免税にしている。ただし合弁会社の出資率はマラヤ五一、外資四九の割合でなければならぬ。日本の代員の中にライオン歯磨の社員がいたが、その人に案内されてこ

のニュータウンにあるライオンの工場を見学した。ホワイト・ライオンのチューブ入りを造っていた。その他には、味の素、セメントなどもあるとのことであった。

ゴムと錫がこの国を豊かにしていることは知られているが、ともあれ人口の五〇パーセントが二十五才以下というのだから、文字通り若い国で、この八月にシンガポール、北ボルネオ、サラワク、ブルネイを合せてマレイシア連邦となれば、さらにその将来は洋々たるものであろう。

東南アジアの国々

マラヤからの帰途立寄ったシンガポール、台北について短かく触れたい。シンガポールは淡路島ほどの大きさの島に人口は百八十万、その八〇%が中国人であるから華僑の都市ともいえる。自由港として栄えたのは戦前のこと。アジアの諸国が独立してからは、中継貿易港としての地位はゆらいで来ているので、目下は工業生産の拡大に大奮である。人口の増加が急速であるから、郊外にどんどんアパートが建てられている。マレーシア連邦が成立すれば、クアラルンプールが政治の中心、シンガポールはビジネスの中心として栄

えることは約束されている。

台北では、同志社出身の本省人の方々に多数お目にかかれた。各方面で相当な活躍をされていることを知ってうれしく感じた。しかし台湾の実情は想像以上にげわしく、前途の多難を思わせられた。お目にかかった政府の要人は「二つの中国はあり得ない。」と強

「新と旧」見て来た中国

岡谷元治

調されたが、現実には二つの中国、二つの朝鮮、二つのヴェトナム、二つのドイツがそれぞれ第二次大戦の申し児のように存在している。東西対立が解消して、真の平和が世界に訪づれるのはいつの日であろうか。その日の一日も早く来たらんことを祈りつつ筆を止める。

(昭六卒・京都YMCA総主事)

日中の交流

井上 靖の原作『天平の躰』は依田義賢が脚色し、前進座が東京でこれを上演して大好評を博したので、京都の南座でも十月から上演する予定と聞いています。この芝居の主人公、鑑真和尚が円寂してから今年が丁度千二百年目に当るからでしょう。彼が招かれて唐から日本に来たのは東大寺の大仏開眼に後れること二年目で、直ちに南都唐招提寺の建立に着手したのであります。彼は弘法授戒の

ほか、数多くの学者、技術家を帯同して来たので、最盛期の唐の文化を我国に伝え、天平文化の礎を築いたと言えますし、正倉院の御物として現在も保存されている珍物の中には唐の土産のほか、唐の都長安に集った各国の産物で鑑真が日本に伝えた物も多いと思はれます。日本の古代文化は実に漢民族の文化を母胎としわれわれの祖先の叡智と努力によって発展して来たもので、当時の法律、制度、風俗、習慣は言うにおよばず、後にまで、わ

れわれ日本人の生活に根を張っている唐の影響は大きいと言はねばなりません。漢字や、これから派生したカタカナ、ヒラカナを別としても、例えばカラスキ、カラザオカ、ラウスのような農具の外に、唐辛子、唐茄子、唐黍、唐チシヤなどの野菜にいたるまで「枚挙に暇なし」です。このようにして日本と中国の文化交流は千数百年の昔から続いておりました。

日本が鎖国の夢破れて開国に転じたのは中国とほとんど期を同じくしていたのですが、その後日本の資本主義化が比較的順調に進んだのに比し、中国は国土が広大であり、人口が龍大であり、資源も豊富であったので、先進資本主義諸国の侵略的となつて、政治的・経済的・軍事的に圧迫され、その上に封建的専制政治が続いたので正常な発展が阻まれて、半植民地的状態が約一世紀にわたって続きました。

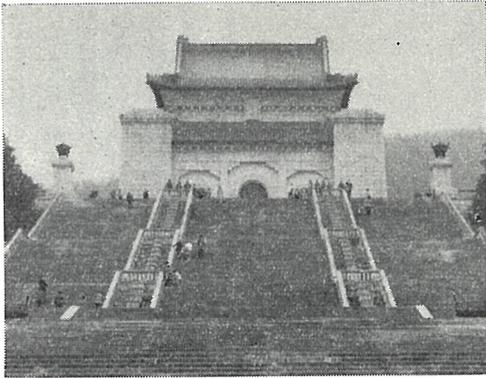
日本は自らアジアの一員であることを忘れて、欧米の資本主義諸国に追随し、互に対立しながらも終始一貫中国侵略の鋒を弛めず、善隣友好の誼を忘れ、中国を侮蔑する政策を採つて来たので、今日なお、帝国主義的侵略

の非を反省せず、中国を敵視し或は蔑視する者が尠くないのは残念なことです。

あの忌はしい戦争が終つてから既に二十年にならうと言うのに、未だに中国との国交が恢復してないのは、何としても両国人民にとって不幸な状態ですから、侵略を開始した日本が先ず反省の衷を示して、国交の正常化を計るべきだと思います。

進む経済建設

私はこのたび中国を訪問する機会を得て、



南京中山陵

北京、天津、瀋陽、撫順、鞍山、濟南、南京、上海、杭州、紹興の十都市および近郊の農村人民公社を訪れ、主として経済建設の進展状況を視察して来ました。見学した主なものは、重工業では——瀋陽重型機械工廠、撫順竜鳳炭礦、撫順人造石油工廠、瀋陽第二機床工廠、鞍山製鋼コンビナート、濟南機床工廠、上海發昌機械廠上海埠頭

輕工業では——北京第二国棉工廠、北京美術工藝廠、上海信誼製襪廠、杭州都錦生絲織工廠

人民公社では——紅星人民公社、大青人民公社、棲霞人民公社、西湖人民公社

博物館、紀念館などでは——故宮博物館、歷史博物館、革命軍事博物館、民族文化宮、山東博物館、雨花台革命烈士紀念館、太平天国紀念館、梅園新村紀念館、中山陵、明陵、魯迅遺跡、秋謹女士遺跡

學校、図書館では——北京大学、天津大学、濟南師範學院、南京機械學校、上海中東大学、北京図書館、の外、工場、礦山、人民公社、居民組織に附属する初級、高級中学、小学校、幼稚園、託児所、業余學校

その外に、人民大礼堂、工人文化宮、少年

文化宮、養老院、療養所、放送局、八達嶺、十三陵ダム、万寿山、太明湖、玄武湖、西湖、映画、京劇、越劇、評劇、話劇、音楽会などにも事情の許す限り出席しましたし、観客の動静にも注意を払いました。

どこの会場も静かだし、喫煙室以外で煙草を吸う者は無く、秩序が守られています。昔は南京豆を食つたり瓜子兒を噛る者が多かつたのですが今はそれも見受けられません。

解放後の経済発展

一九四九年十月一日、中華人民共和国が成立し、これまで不当にも諸外国に掌握されていた諸権利を自らの手に回収した中国人は、自国の運命の主人公と成りました。それ故に中国ではこれを解放と呼んでいます。解放前の中国は外国帝國主義の圧迫を受けていたから経済的に極めて遅れた国でこの当時は世界各国と比較しますと、鋼鉄の生産量は第二六位、発電量は二五位、採炭量は九位、綿糸生産量は五位を占めるに過ぎず、農業国でありながら、小麦、米、棉花は毎年外国から輸入しなければなりません。従つて対外貿易は永い間輸入超過が続き、国家財政も毎年赤字の連続でありました。解放後十年を経過

した一九五九年には鋼鉄の生産量は世界で第七位一、三三五万トン、発電量は第一位四一五万キロワット時に達し、採炭量は第三位三億四千七百万トン、綿糸は第二位八二五万梱に増加しています。貿易においては入超を克服して均衡を保っているし、従前の輸入は消費物資が主であったが現在では各種の生産手段に変わっており、これは新中国の工業が躍進しつつあることを示すものであります。

旧中国では交通運輸事業も帝国主義列強の植民地支配体制下にあつて完全に自主性を失ない、鉄道は直接、間接列強の支配下にあるものが九〇%におよび、その全通車距離も一万一千キロに過ぎなかつたのですが、六一年には三万三千キロに達しています。自動車道路は旧中国で十三万キロと称しておつたものの、長期の戦争で實際通車可能な距離は七万キロに過ぎなかつたのですが六〇年末には四十万キロにおよぶようになっています。商品の小売総額は五〇年に比し六〇年では四二五%、七二五億円に達し、物価指数は五二年を一〇〇として五八年では全国卸売物価で一〇〇・一、全国小売物価で一〇八・三ですから物価は安定していると言はねばなりません。

今日では中国の一元は日本の一六一円に相当します。

経済建設の高まりは不可避免的に文化建設の高まりを伴うので、全国の大学や専門学校の学生数は七倍余り増加して、五九年に八・一万人に達し、初級、高級中学合計で一、〇五二万人、小学生は九千万人になっています。

全国学齡兒童の九〇%以上が就学し、解放當時四十五才以下の者を対象とした文盲一掃運動は業余学校の活用と相俟つて基本的に目的を達成したようです。

人民公社の発展

解放の前後から始まつた土地改革によつて、農民が永い間渴望していた土地を手に入れることが出来たので、農業生産の意欲は著るしく高まりはしたが、全国平均一人当り三畝(〇・二ヘクタール)と言う零細な土地が個別に分配されたに過ぎなかつたので、単独経営の不利を脱却するために互助組を組織し、集団労働と生産手段の共同使用を通じて、農業協同化の政策が採用され、かくして貧農に依拠し中農と提携する農業生産合作社は初級から高級へと漸次発展し、ついに、五八年の大躍進を経て人民公社が全国いたるところ

で結成されるにいたしました。

人民公社は簡単に言いますと、農業生産協同組合が大規模に発展したもので、構成員は全国平均五千戸、一郷一社ですから郷政府の機能も公社が代行しています。農業を主として附属する工場、購販合作社、信用合作社、病院、学校、養老院、托児所などを経営しています。大規模な水利事業や發送電事業なども農業生産合作社の手では処理出来なかつたものですが今は公社で経営しております。

新中国は社会主義社会の建設を基本方針として、これを総路線と呼び、農業を主とし、工業を導き手とし、重工業と軽工業の同時発展を計るのを二本脚で歩くと言っています。工業では前年に比して二〇%、農業では一〇%以上の増産を大躍進と呼びそれに人民公社を加えて、三面紅旗を高く掲げ

鼓足干劲、力争上游、多、快、好、省、建設社会主義、(より高い目標を掲げて力一杯頑張ろう、多くの好い品物を速かに生産し、無駄を省いて社会主義を建設しよう)を合言葉として、中国人民は質素に勤勉に真面目な努力を続けております。

(経済学部教授・東洋経済史)